



二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

小説 水坂早希

挿絵 ひぐちいさみ

第五話

最強の敵

第六話

囚われた翔子とエミット

第七話

恥辱の学園風景

第八話

鮎と鞭

第九話

完全な敗北

007

045

115

180

223

登場人物紹介

Characters



くすのき さ え
楠 沙枝

白樺学園に通う少女。エミットに見込まれて、違反者を迎え撃つ即席魔法使いに選ばれた。かなりの恥ずかしがり屋。

にしじま しょうこ
西島 翔子

沙枝の親友。上品な物腰のお嬢様。魔法を使う素質があったため、沙枝と同じく即席魔法使いに任命された。

エミット

エーテルランドの妖精。人間界に侵入する違反者たちを撃退するため、沙枝の前に現れた。

ゼロ

多数の魔獣を従える獣使いで、エーテルランドの女王並みの魔力を持つ。

イーシャ

ゼロの妹。粘液性の妖魔や触手を操る。

嗜虐に彩られた、くすくすと笑うイーシャの声。

車のエンジン内部のように、激しく三本のシリンドラーが前後した。そのたびに、沙枝の股間から熱い蜜が迸っている。

「見ないで……見ないでください……い」

たとえ記憶を消してもらったとしても、もうこのクラスの男子たちの顔を見れないと思った。

奴隷になってしまった錯覚がする。頭の中に淫らな熱が籠もっていて、なにも考えられない。

「いや……あああ……うああ……！」

快感と腹痛と羞恥で泣き叫ぶ沙枝をあやすように、太腿やふくらはぎを何本もの手が、撫で回していく。ヴァギナを指で掻き回されると、カチューシャを嵌めた頭部が机の上で指の動きに合わせて転がった。

級友の四十本の手で執拗に嬲られ、二穴をこね回され、何度も潮を噴かされ、次々と透明なスライムを流腸されていく。

いつの間にか、苦しみが快感にすり替わっていた。

尻房が左右に広げられ、潮を噴き出す膣口が露わになる。そこに指が突きこまれてきた。

ぶしゅつと撒き散らされる潮で手をずぶ濡れにしながら、手の主——浅樹は膣壁をこりこりと擦り上げている。膀胱近くのGスポットを刺激され、潮の噴出がさらに激しくなっていく。

小さな火花が何度も目の前に散っている。沙枝は軽い絶頂を何度も何度も味わわれていた。意識を失うほどでもなく、かといって無視できるような感覚でもない。

「あう！ ひあ……やめてえ。こんなので、はふ……イキたく、ううっ、ないよお……」

下半身には蜜と潮を、顔には涙を、そして全身には汗を流して、沙枝はどろどろになって訴えた。その肉体は十数秒に一度訪れる痺れに翻弄され、びくびくと痙攣している。



桜色の陰唇は無残な蹂躪を受け、薄桃色の肛門は三本がかりの浣腸器に大きく広げられている。二リットルもの液体を呑みこんだお腹が、不自然にぽっこり膨らんでいた。壁に挟まった場所が圧迫されて、痛みと切迫感を送りつけてくる。

この状況では、いつ逆流が始まってもし思議ではない。

「ト、トイレに行かせて……ください。おねがい……ああっ」

たとえ正体がばれていなくても、クラスメートの前で浣腸液をぶちまけるのだけは嫌だった。やつとのことでそれだけを言って、苦しうに目を細める。ぱくぱくと開閉を繰り返す口からは、彼女の苦悶を示すような涎がたらたらと垂れ落ちていた。

「……いいわよ」

その、苦し紛れともいえるような嘆願に返ってきたのは、意外にもイーシャの許諾の返事だった。

もう限界の近かった沙枝には、それを受け入れない理由はない。

しかし壁越しに悶える沙枝には、イーシャの瞳が妖しく光っていることは当然ながらわからなかった。

☆

白樺学園からエーテルランドに強制送還されて、ゼロの力を借りて再び人間界に戻ってきた魔獣たちは、酷くしょんぼりとしていた。

「だから言ったでしょう。沙枝さんは貴方がたケダモノ如きがいくら束になったところで、遅れはとらないのです」

そこは例の黒い空間。翔子は高い所から、うなだれている獣たちを見下して傲然と言った。そうだ。あの心優しくて芯の強い尊敬する親友はこの程度の敵には負けたりしない。それがわかっていたから、翔子は魔獣たちの出撃前に一計を案じていた。

完敗したため一切言い返せない獣たちは、さすがに

凄むこともできず、やつぱりうなだれていた。彼らが人間だったら、さぞかし赤面していることだろう。

そして、彼らの優位に立っているはずの翔子もなぜか、羞恥に頬を染めていた。沙枝襲撃に行かなかった魔獣たちが、なにか奇妙なものを見る目で翔子と失敗者たちを眺めている。その視線を振り払い、恥ずかしさを我慢しながら、翔子は話を切り出した。

「と、とにかく、約束通りエミットさんを瓶から出してもらいます」

「なんだお前たち、そんな約束までしていたのか。大方こいつの口車に乗せられたな？」

ゼロの声が頭の後ろから聞こえてきた。

翔子はたまらなくなつて太股を動かした。その下のがつしりと逞しい膝を感じて、ますます頬が熱くなる。そうなのだ。沙枝の目の前で処女喪失の憂き目にあった後からずっと、翔子はゼロの膝の上に座らされているのだ。これが、恥じらいの理由だった。

脚を揃えてゼロの膝に座らされた翔子は、鎖で手首を後ろ手に縛られていた。

時々思念を吸われてはいたが、基本的になにもされていない。意識が明瞭な分、自分がじわりじわりとこの状態に慣れていくのがわかるようで怖かった。

実際、じつとしていううちにお爺様に抱っこされていた幼い頃の懐かしい気持ち思い出してしまい、少し寛いでしまったのも事実である。

早くも翔子をペット扱いしているゼロが頬を撫でてる。気を抜くと、身体から力が抜けて甘えるように後ろに寄りかかってしまいそうだ。

「いい加減、降ろしてくださいませんか……な、なんでしたら、私があなたを膝の上に乗せて、いい子いい子して差し上げても構いませんか？ 女性を力ずくで抑えこもうとするような肝っ玉が小さくてマザーコンプレックスのありそうな、嫌われる男度ナンバーワンの殿方が、優しくしてもらえる千載一遇のチャンスか

と思います」

「俺に奉仕する気になったか。いい傾向だな」

軽口を返しながら、仕方なさそうにゼロがため息をついた。そして、手近にいた白狼にエミットを瓶から出すように指示を出す。

「……お前たちのした約束は俺のした約束でもある。だが……後でイーシャが怒るぞ？」

六匹の獣たちが色取り取りの体毛を逆立てながらすくみ上がった。

それを見て呆れたように肩をすくめた狼が、両方の前足で器用に瓶の蓋を掴んで、エミットごと取り外す。尖った爪で蓋についていた留め金を外すと、パカンと割れて触手漬けにされていたエミットが解放された。

「あ、翔子お……」

泣きべそを掻いていたエミットが、白狼の口に摘まれて床に降ろされた。全身を蜜漬けにされた酷い有様で、雨曝しになった洗濯物のように無残に濡れたミデ

イドレスが、ボロ雑巾が落ちたようなびちゃりとした音を立てた。

「もう大丈夫ですよ、エミットさん。沙枝さんがやってくれました」

それを聞くと、少しやつれた顔に安心したような表情を浮かべ、エミットはそのまま気絶してしまった。

エミットの入られていた瓶を白狼に持つてこさせ、たゼロが、中身の量を確かめる。

「ふむ、まあいいだろう。十分な量は取れている」

そして、いきなり翔子の胸の黒いボディストッキングを引き裂いた。

——ビリイイッ。

「……え……きやあああああつっ!？」

突然そんなことをされて、当然ながら翔子は絹を裂いたような悲鳴を上げた。生まれて初めて男性の視線に胸を晒したのだからまったくもって当然の反応だ。しかも、隠したくても腕は封じられているのだから、

狼狽しても仕方ない。

丸い見事な張りを持った乳房が跳ね、ぷるぷると小さく震える。

「な、なにををするのですかっ、この変質者！」

くつと背を丸めて胸を隠そうとする。しかし豊かな乳房はそんなことで隠しおおせるはずはなく、きゅつと谷間を作って柔らかさを見せつけただけだった。

そんな翔子の抗議にも馬耳東風のゼロが、瓶に溜まったドロリとした妖精の愛液を掌に少量垂らして、魔力を込めた。液体が一瞬輝き、つい何事もなかったかのように元の白濁液に戻る。

「さすが、妖精族の愛液は触媒としての効果が違うな。ここまで純度の高い薬液を作れたのは久しぶりだ」

ゼロが右の掌に溜めた濁り気のある液体をしげしげと見つめる。そして、それを翔子の破かれたボディストッキングから覗いている胸元に近づけた。

「聞いているのですか——って……や……あう……」

剥き出しの乳房が無造作に掴み上げられる。その掌が、ねつとりと濡れていた。

ローションのような粘液が乳房に塗りこまれる。散々嬲られ拘束された肉体は、胸乳への官能的な侵犯に抗う術がない。

きゅむきゅむと、ゴム鞠のような脂肪の塊を優しく揉まれると、翔子の瞳が切なげに潤んだ。

「……なにを……する気です」

そんな自分を叱咤するように、唇を噛んだ翔子が厳しい瞳を背後に向ける。極力ゼロの威圧感を感じないように意識を閉ざしながら、翔子はそれだけを尋ねた。「お前の見事な胸をただ遊ばせておくのもつまらない。母乳が出るようにして、有効利用してみたらどうかと思っただけ」

「な……！」

翔子のしつとりとした肌は自然にゼロの掌に吸いついてしまう。乳肌にまわりつく薬液は、驚異的な速

さで毛穴から吸いこまれていきつつあった。

ゼロが十指を閉じると、白いパン生地かなにかのようには形を変え、指の間からはみ出そうとしてぐにやりと膨れ上がった。幼い頃からの胸虐めですっかり熟成した柔らかい脂肪の塊の、圧力で潰された箇所が感じるのは痛みではない。それは、パン生地を発酵させるかのように熱く淫靡な火照りだった。

「んっ……！」

じりじりと火に炙られる乳房の芯。そこにやがて変化が現れた。

胸の中でどんな奇怪な作用が起きたのか、左右の乳房が張り始めたのだ。ゼロに揉まれて豊かな球体の形が歪むたびに、乳輪の奥に物理的な圧迫感が集まって張りを増していく。

「あ、ああ……！　こんな……むね、が……はうっ!!」

翔子の顎がガクガクと揺れ、涎が垂れた。

「は……あ……」

ミルクが溜まっているせいだろうか。乳房が硬く痛つてくる。

「このままでは水風船のようになってしまうな」

耳元で甘く囁かれた。翔子は必死に反抗の言葉を紡ぎ出そうとしたが、口が吐き出すのは熱く濁った呻きだけ。

「どうだ、母乳の出し方を教えてもらいたいのか？」

乳房が掬い上げられ、五指が硬く張り詰めた場所をぐりぐりと圧迫してくる。砕け散った疼きが乳房全体に広がり、意識を焼いてぼうつとさせてしまう。

「く、苦しい……！　そこ、何度も揉まないで……」

知らず口走った言葉は、翔子らしくない弱気なものだった。お行儀よく揃えられた脚がぎゅつと閉じられて、じつと煩悶に耐えている。しかし、自分の胸の感じるところを知り尽くした彼女だからこそ、今自分の身に起きている未知の変化が恐ろしかった。

乳輪の下になにかが張り詰めていくのを感じて翔子

はおののいた。もぞもぞと疼く妙な感覚が、強烈な切迫感を伴って渦巻いていく。今にも先端から快感が噴き上がりそうだ。

「さあ、しっかりとこのタイミングを覚えろ」

ゼロに操作されるままに背を反らし、胸を前に突き出してしまふ。

途端、胸の先端にわだかまっていたものが弾けた。

「ふあ……はくあああああああつっ！——うあああああああああつっ！」

少女の壮絶な嬌声が迸る。

予想以上に艶かしく、信じられない光景が翔子の潤んだ瞳に映っている。真っ白いミルクが霧吹きのように、幾つもの微細な乳腺から噴き出していた。

「ああ、わたくしの胸から、胸から——出てるううっつ！……は、ひはっ!!」

ゼロが牛の乳を搾るかのように力強く揉むと、魂が抜かれるかのような虚脱感と共に、大量の白乳が芸術

的な噴水となって宙にしぶきを上げる。

大きな乳房を支えた指がきゅつと窄まった。と同時にびしゅつ、と迸る液体。顎を反らした翔子が一時の安堵を得ると、今度は逆の乳房が搾られる。

翔子にとってはたまったものではない。首を左右に振って嫌々をし、言葉にならない悲鳴を上げる。華奢で小柄な肢体が男の腕の中で激しく跳ねた。

しかしゼロが手に力を込めると、暴れていた身体がピタッと硬直する。そして、背を反らし、目を切なげに細め、口を大きく開いての噴乳。

「胸が……んうっ！ 出ちゃう……出ちゃう……つ、の、に……」

驚愕、そして熱を持った瞳が自分の乳房に注がれる。噴出の瞬間だけは疼きを静まらせる乳房の芯だが、次から次へと張り詰めていく感覚は収まらない。ただ母乳の抜け出ていく虚脱感と、ふわふわした不思議な快感が延々とあるのみだ。

「や、やめて……これ変……変になるの……ひやはや
あああああつっ！」

両方の乳房がぎゅっと握られ、柔肉の塊が上向く。

「だ、だめですっ、こ、これ以上、は……っ！ んん
んっ!!」

丸い球面からびこんと痼り立った乳首から、盛大な
噴乳が起こっていた。

「ひあああああ……！ あ、くう……ううん……」

びゅーっと宙に舞った白い母乳が、噴水のように広
がって降り注いだ。

がくりと肩を落とし、大きく息を吐く翔子。見下ろ
す乳房からは、ぷちぷちと溢れ出した乳が今も流れ出
ている。

ゼロはその噴乳を最後に、それっきり乳房から手を
離れた。

「後であいつらにこの極上のミルクを振る舞ってもら
う。今のは、その予行演習だと思え」

魔獣たちを指差し、はあはあと荒い息を繰り返す翔
子にそう告げた。

それに応えるのは、まるで自慰で達した後のような
脱力感と疲労に包まれて吐き出された、翔子の弱々し
い吐息のみ。

「あ……は……くあああああ……」

「続きはイーシャが帰ってきてからだ」

たった数度の射乳で身も心も崩れそうになった翔子
は、ぐったりとうなだれたまま身を震わせた。

しかし搾乳が止まれば止まったで、胸の奥に残った
痼りが疼く。いけないとは思っていても、ゼロの掌の
味を思い出して背筋に薄寒い恍惚感が走ってしまうの
を止められない。

「あ……う……んう……」

垂れそうになる涎をなんとか飲みこみ、鳴きそうに
なる喉を宥めすかして息を整えた。

悔しさを紛らわせるように悪態を吐く。



「な、なる、ほど、故郷から追っ手がかかっている、親の死に目にも遭えなさそうな親不孝者の犯罪者の皆さんは……母乳というものに淡い憧憬を抱いていらっしやるのですね。ふ、婦女子をかどわかつて母乳を飲ませてくれとせがむほど追い詰められているとは、同情を禁じ得えませんか」

「そう言うな。それよりも、礼を言うべきことがないか？」

ゼロに言われると敵意がすくみ、萎んでしまう。とても幼い頃、習い事の教師が帰るときに挨拶をしなかったので、祖父に窘められたときの記憶が蘇った。

「……れ、礼を言うべきことなど思い当たりませんが、今すぐ警察に通報して社会的にあなたの存在を抹殺して差し上げたいことなら無数にございますけど」

「強気だな。だがすぐに俺への忠誠を教えこんでやる」
抗する翔子の後ろでゼロが不敵で傲慢に笑った。手
の甲で頬にかかった髪を優しく取り払われる。一切淀

みがなく、洗練された仕草だ。翔子は、わずかな動作、何気ない仕草にこそ、その者の本質が現れることをよく知っている。トンボ眼鏡のすぐ横から感じたのは、生まれながらに全てに君臨することを運命づけられ、かつその道を迷うことなく突き進んできた者のみが持ちえる威圧感だった。

王者の威厳を間近に感じた翔子の身体が、我知らず硬直している。

——ご、ごめんなさい……沙枝さん……。

祖父の顔を思い浮かべてしまうともう駄目だ。祖父への思慕の念とゼロへの恐怖や畏怖が混ざり合っていて従順になってしまい、恥ずかしいセリフを口にしてしまう。

「ば、母乳の搾り方をご教授頂き、ありがとうございます
ました……」

「いい子だ」

ゼロに優しく頭を撫でられた。凄まじい屈辱感に耐

えられず、翔子はうつむいてしまった。

☆

授業と授業の間のわずかな喧騒。いつもと変わらない廊下の光景。

不可視の魔法をかけられた沙枝は、よろよろとその中央を歩いている。

どうしてイーシャがあんなにあつさり自分を解放してくれたのか、沙枝はすぐに思い知ることになった。いた。

「あなた、男子に結構人気があるそうね」

世間話でもするかのよう、イーシャがぴつたりと隣についてくる。

女子トイレへと急ぐ沙枝は返事をしない。痛みの酷い崩壊寸前のお腹を抱えていては、声を出すのさえ辛かった。今にもその場に蹲ってしまいそうな羞恥を感じているのに、受け答えをする余裕などなかった。

裸体を魔力でラッピングされた沙枝は、透明人間状

態で歩き続けた。浣腸液が渦巻くお腹が痛い。それなのに、たつぷりと愛撫を受けた身体はどこかほわほわとしていた。

幸いなことに魔法の結界のおかげで、ぶつかりそうになった人は無意識に沙枝とイーシャを避けていく。ただ直進さえすれば、女子トイレに到達できるのだ。

それなのに――。

「う、う、ううう……」

「嫌ね、もう少し品のいい声を出したら？ ペットになつてからも、お兄様に恥をかかせるような真似は絶対できないようにきっちり躡てあげるからね」

その直進が重労働だった。一步踏み出すたびに膝が笑う。

しかも、歩幅を大きくしようとすると、イーシャにぎゅつとお尻の柔肉を掴まれて制止させられてしまう。便意に耐えかねてトイレまで走ろうとした日には、あろうことか腕で後ろからお腹を締めつけられて立ち止

まらされてしまった。

一度それをやられた沙枝は、もう限界寸前だ。ここにオマルがあつたら、一切躊躇わずしゃがみこんでいるだろう。

堪えきれずに排泄してしまつたら、今効いている不可視の魔法が解けるように設定されていると聞いたので、沙枝は必死だった。しかも沙枝はコスチュームを脱がされ、帽子と腰のリボン、ストッキングと靴だけの、裸より恥ずかしい姿にされてしまつていた。もし魔法を解除され、その姿のまま排泄する姿を晒すことになつてしまつたら……。

身体中を真っ赤にしながらも、ただひたすらトイレへ向かうしかなかった。

いつもは近いトイレへの距離が、今ではイギリスよりも遠く思えた。

「はあ……う……お腹が、痛いよお」

腹痛に急かされ、無意識に小走りになろうとした沙

枝のお尻をぶにつと摘んで、イーシャがころろと笑う。

「廊下を走つてはいけません、つて貼り紙が見えないのかしら」

沙枝は涙目の恨みがましい目で隣のイーシャを見上げた。いくら純真無垢な沙枝とはいえ、ここまでされれば人を恨みもする。しかしその感情は、きつい眼差しの美女が「なにか文句でもあるの？」と尊大に微笑んだ途端掻き消えてしまつた。

「あう……」

もともと心優しい沙枝だ。憎しみのような負の感情は心の中にあまり居場所を貰えておらず、他人を本気で憎んだりなどできない。親友の身の安全や人々の幸せがかかればこそ果敢に戦いもするが、被害を受けるのが自分自身になつてしまうと、途端に反抗心や敵意といったものと無縁になつてしまうのだ。

「さあ頑張るのよ」

形だけのイーシャの励ましを受けた沙枝は律儀にコクンと頷いて、カタツムリが這うような歩みを再開した。廊下の中央を、少しよろよろしながら歩き続ける。

往來の中央を歩くという、行儀の悪いことをしているだけでも後ろめたいのに、この格好とグリセリン溶液の詰まったお腹。もしここで肛門を決壊させてしまったら、最悪の恥態を正気の衆目に晒してしまうのだ。恥ずかしがり屋の沙枝でなくとも、心胆寒からしめしてしまう状況だろう。

「お願いです……走らせてください。ここで出しちゃったら、もう学校に来れなくなっちゃう……」

嫉妬のふんだんに籠もった声が返答した。

「いいじゃない。お兄様のペットになれるのなら、もうここに來ることもないんだし」

同情の欠片もない言葉に絶望しながらも、ようやくトイレが見えてきた。たった今、数人の女子が連れ立って歓談しながら出てきたところだ。

「ほうら、あの子たちの目の前に排泄するあなたが急に現れたら、さぞかしびっくりするでしょうね？」

「え……ひあっ！」

いきなり、沙枝のお尻にぐにぐにしたものが絡みついてきた。ロープくらいの太さを持つイーシャの触手が、菊門に入りこもうともどもぞ蠢いている。

「やめ、やめてください……そんなこと……それだめええ」

「あら、あんまり抵抗すると、この場で出しちゃうことになっちゃいそうだけど……？」

触手は足にも絡みついて、沙枝の弱々しい歩みを妨害していた。

「うあ……そんな、ひどい……」

それだけではできない。明らかな嫌がらせだが、受け入れるしかなかった。

きゅつと拳を握って、お腹に込めた力を少しだけ緩める。と、触手はぐにぐにと胴体を振りながら肛門へ

と潜りこんできた。

後口をくすぐるぞくぞくした感覚が、このまま力を緩めてしまえと誘惑してくる。沙枝は必死にその誘惑と戦い、開いてしまいそうになる門を力んで締めつける。

しかし触手は頭を潜らせただけでは満足していなかった。

「はあう！ は、入らないで……止まってください……」

それは頭を左右に振りながら、引き締められた括約筋の奥に進もうとしてくる。悪寒が背筋を這い上がり、おぞましい快感が尾てい骨のあたりに集中する。

「漏らさないように栓をしてあげてるんじゃない？ 優しい子ね」

イーシャはあくまでおどけた態度を崩さず、沙枝に取り合わない。

「ひっ、ひあ……あああ……！ だめ、あるけ、な……」

い……うう……」

触手が押し入るたびに、沙枝は身をくねらせた。歩くどころではない。触手が人差し指ほどの長さまで埋没すると、沙枝はまったく身動きが取れなくなってしまう。

その場に立ち尽くしたまま、冷や汗を流し続ける。さながら汗を掻く彫像だ。

「嫌、もういやあ……っ」

尻穴から垂れたたった一本の触手に持ち上げられるようにして、爪先立ちになり、瘡おできにかかったようにふるふると震える。

汗ばんだ肌にまとわりつく紅色のリボンが気持ち悪い。身体を悪寒が支配していく。

「だ、だいたいおかしいですっ、私がゼロさんに近づくの嫌なら、進んで調教の手伝いをする必要なんてないじゃないですか……っ」

現状を打破しようと、唯一動かせる口を働かせた。

だが、

「余計な弱音を吐かないで歩きなさい！」

パシン、とお尻を叩かれてしまう。口答えはより悪い結果を招くだけだった。

真っ赤に手形のついた山が、今にも崩れそうに痙攣する。その奥では、噴火に匹敵する爆発力を秘めたグリセリンのマグマの対流が起きているのだ。

——こんな所で出したいくないよお！

汗の粒が健康的な脚線をゆつくりと垂れていく。沙枝は必死に歩を進めようとした。ずりずり、ずりずりと、ゆつくり足を引きずるような歩み。

「ふふ、頑張るわね……虐めがいがあるわ」

面白がったイーシャが陰唇に触れてきた。

「ああ……んう」

二本指を添えて縦一文字の陰唇をさすりながら、同時に腹でクリトリスを挟んでくる。ブルンと跳ねるゼリーのように剥けた陰核が、歪なひょうたん形にされ

た。それが根本から引き抜かれるかのように、前後へと揺さぶられる。

びきつ、と身体が硬直した。

「あ……あががが……ひゃめつ、お豆つ、ひっぱらないれつ、潰しやないれく、りやはっ」

沙枝は、電に打たれたかのように全身を痙攣させる。頭が混乱して、まともな言葉が喋れない。歩みも動きもぴたりと止まった。

「気持ちいいことしてあげてるだけじゃない」

イーシャの指が股間に蠢く。下腹の中に溜まった苦しみと、外側から押し寄せる快楽に揉みくちやになる沙枝の頭の中。どうしていいのか、どうすればこの状況から逃げ出せるのか、焦るばかりでまったく思いつかない。

その間にも、優しいげな瞳が涙と快楽の混じった色に濁っていく。

「はひ……！　お願いですから、さわら、な……う、

うううう……！」

ずいぶん奥深くまで潜りこんだ触手が、腸の中に詰まったスライムをぐちよぐちよと掻き回す。腹部に差しこむ痛みに、沙枝の顔が涙に泣き濡れる。

「も、もうらめ……あああ……もうらめえ、れす……う……」

触手に栓をされた肛門がぶつくりと盛り上がる。窄まりと触手、その間に開いた微かな隙間から、透明な液がつうつと触手を伝って落ちていく。

その途端、無情にも魔法が解けた。

不意に廊下の喧騒の質が変わった。一瞬水を打ったように静まり返り、続いて大きくザワツとどよめく。そして、それから後は困惑したような、混乱したような乱れたざわめきが、音の波となつて広がっていった。

「え……あ？　な、なんでえ……？」

周囲の視線が自分に向いている。一拍遅れて、沙枝はやつとその意味に気づかされた。

「やだ……なんて見えてる……の？　ううつ、くつ、はあああ……う」

イーシャにすがりつき、その顔を見上げる。

「だって……ほら、少し出ちゃったから」

彼女は触手を手に取り、そこに垂れた米粒ほどのグリセリンの滴を指差した。

「あ……あ。そんな……そ、それだけ……？」

おそろおそろ巡らせた視界。生徒たちの視線は、突如廊下に出現したきつそうな目つきの褐色の美女と、その隣で顔を真っ赤にして涙を流している、リボンやストッキングで裸体を飾られた少女に向けられている。

「な、なんだ!?　いきなり女の子が……！」

「うわ、スゴイ格好してるな」

「え……なに……さ、沙枝ちゃんっ!?」

自分の名前を聞いた途端、沙枝の心に亀裂が入った。

「ち、がい……まひゅ！　わらひ、さえ、じゃああ……いはいはいやああああああ見らいでえええええ

えええええつつつ！」

イーシャにクリトリスを齧り倒されている沙枝は、みつともないくらい大きく口を開け、涎を垂らして泣き叫ぶ。

「なあにその顔！ お兄様のペットになるのにあまり締まりのない顔をしないでちょうだい！」

—ブズツ！

イーシャが触手を勢いよく引っ張る。それは致命的な刺激だった。

「ひあ！ あ、ああああうあつ!! ぬ、抜けひやう……
…おしり、いやああ!」

ずぞぞぞぞ、と勢いよく引き抜かれていく触手とともに、肛門がめくれ返って透명한グリセリンのしぶきを飛ばす。

「ひいやあああ！　もうらめれえええつつ！！　た、たすけ……ひはっ！！」

触手が全て抜け出たぬぼん！ という音と共に、呂

律の回らなくなった沙枝の膝がぐくりと崩れ、生徒たちの前で便器に屈むような姿勢になってしまった。

必死に張り詰めていた気持ち、それを契機にがたがたと音を立てて崩壊していく。

「もお、らめえ！
で……ちやうううううううう！！」

叫びと共に、沙枝の肛門が開いた。溜めこまれていたものが勢いよく噴き出していく。

——ムリ……ムブジャアアアアアアアアアアツツ
ッ！

しかもそれは、過去の経験と照らし合わせて予想していたような液体ではない。それらに混じって、括約筋を内側から広げる固形物の感触がした。より本来の排泄物に近い透明な固形物を、級友たちが啞然と見守る中で大量に絞り出してしまったのだ。

耳を塞ぎたくなるような下品な音があたりに響いた。
「ああああああ——つ、と、止まつて、
止まつてえええ！」

最後の抵抗を試みようとお腹に力を込める。

しかし噴出が止まることはない。肛門に締めつけられてぐちゅりと千切れたスライムは、すぐにまた肛門を盛り上げてボタボタと噴出してしまふ。

「ううあ……あああ……ひいん……」

それどころか、力みすぎた沙枝は尿道までを開いてしまふ。じゅっ、じゅじゅじゅっ、と断続的に噴き出る小水は、余計に被害を拡大させてしまった。

肛門を大小にヒクつかせて、アナルパイプのような形状の固形物をひり出す少女。肛門をまん丸と広げ、お尻を高々と上げて、極太の固形物で長い尻尾を作ってしまう。

どろどろの液体が、沙枝を中心にして床に広がっていった。

学園のアイドルともいえる沙枝が突然半裸で現れて、しかも廊下の真ん中で排泄している。廊下は騒然となった。

「さ、沙枝ちゃん……？　沙枝ちゃんだよね？　ど、

どうしたの……どうして……！」

「え、ええっ、あれ楠さんなのかつ？　どうなってるんだっ!？」

「俺、保健の先生連れてくるっ！」

こういうときに嘲笑ではなく心配の声が上がるのは、白樺学園の美徳だろう。だが、そんな優しい生徒たちの前でこのうえなく無様な恥態を晒すからこそ、沙枝の心はズタズタに裂かれてしまふ。半狂乱になった沙枝は、死に物狂いで頭を振り乱した。

「見らいで……見ひやいでええ……見らいでえええっつ！　誰も連れてこらいでよおおおおおおつっ！」

瞳を涙で一杯にして叫ぶ。可愛らしく揺れる腰のりボンの下では直腸からの排出がなおも続き、それを止めることも、腰を上げることができない。じっと姿勢を固定している他ないのだ。

視線の渦の中央で、沙枝の心は碎けて奈落の底に沈



みそうになっていた。

その傍らに立つイーシャが、少女を見下ろして口を開く。

「今ここでお尻だけで自慰をして達しなさい。そうすれば、皆の記憶をちゃんと消してあげる」

逆に言えば、肛門自慰で絶頂しなければ、永久に沙枝の排泄の記憶を生徒や教師に残してやるということだ。

「ほ、ほんとうに……？　ほんとう？」

心が碎けそうになっていた沙枝は、イーシャに命じられるままに申し出を受けた。こんな状態に至ってしまつては、それ以外に手段がない。

沙枝は排泄が終わつても立ち上がらない。続きをするかのように同じ姿勢を取り続け、両手を前後から股間に差し入れた。自慰の体勢だ。

「さ、沙枝ちゃん、なにをするの、駄目だよ！」

顔を赤くした少女が一人駆け寄ってくる。前のクラ

スで一緒だった、しつかり者の友達だ。

「こ、来ないひええええ！」

「そうね、せっかく面白いことになっているんだもの、邪魔はされたくないわね」

イーシャが手を振つた途端、走る姿勢のまま、その少女はぴたりと動きを止めてしまった。意識はしつかり残っているようで、驚愕に目を見開いて沙枝を見つめている。

沙枝は屈んでお尻をやや後方に突き出し、まるでお腹の中に残つたものを引きずり出すかのようにアナルへと手をあてがつた。

彼女とは思えない荒々しい勢いで、二本の指が菊門に突き入れられていく。

「んふ！　ううつ、お尻で……するの……みんな、見ないでえ……」

だが状況は混沌としている。誰も彼女から目を逸らすことができない。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>